

4. 各課報告

図書館庶務課

図書館庶務課業務は、図書館資料の選書、発注、支払い、除籍、調査・統計業務、各種契約業務、予算管理、各種委員会事務局業務、図書館システムの運営・開発、広報等に加え、図書館事務部の他課に属さない事柄を扱う。いわば図書館のテクニカルサービスを担当している。図書館庶務課の役割は多岐にわたるが、図書館全体のレベルアップ、とりわけ効率の良い業務の展開や利用者サービスの向上のための環境整備をすることが役割である。課内各係は、庶務(経理を含む)係、発注、システム係に分かれている。

以下に、2002年度に図書館庶務課で展開された主な業務概要を報告する。

1. 私立大学図書館協会役員校としての任務

(最終年)私立大学図書館協会監事校として2年目であるが、1999年の会長校就任から4年目の年である。協会の常任幹事会、東西合同役員会、総会、東地区の役員会、総会等々の会議に武内部長、大野庶務課長、折戸課員を中心に出席し、その役割を果たした。

2. 嘱託職員が担う業務を業務委託化へ移行

図書館運営に欠かすことのできない人材として数十名の嘱託職員がいるが、大学と個人が雇用契約するこれまでの形から、業務委託とする方針を立てそのための折衝、交渉を関係機関と頻繁に行った。2003年4月から一部を除いて業務委託が実現することとなった。

3. 受入係の分離

従来「発注・受入係」として業務を展開してきたが、2002年度より、業務の効率化のために、受入業務、装備業務を整理課に移管し、同時にそれに関わる人員の異動が行われた。

4. 中央図書館建築後検査

中央図書館が竣工して2年を経過したが、日建設計、竹中工務店、明治大学による検査が行われた。図書館と100周年記念図書館のつなぎ目の水漏れ対策、騒音対策、地下3階外周部分植栽の不成育対応、入館ゲートの問題等様々な問題が発生している。その対応について一つ一つ解消に向けて関係機関との調整が図られているが、総合サービス課と共同して対応にあたっている。

5. その他

- ① 大型寄贈の申し出があった。故木元錦哉氏(元法学部教授)、故松岡英夫氏(元政経学部講師)、江波戸昭氏(元商学部教授)らから申出があり、木元、松岡両氏の蔵書を受贈した。
- ② 総務部から、高額図書購入に関わることは、契約書を取り交わしたうえで取引を行うようにという指示があり、手始めにスエッツ社との売買契約を取り交わした。
- ③ 図書館特別資料収集に関し、本年度から、「大学院研究科共同研究取扱要綱」が施

行され、購入した資料は共同研究対象となった。それに伴う諸手続きや協議が、大学院事務室をはじめ、教務理事を含めた中で繰り返された。

④ 国立大学の独立行政法人化（2004年度から）に向けて、国立大学からの来訪が相次ぎ（東京大学、東北大学、筑波大学、三重大学等）、私立大学の図書の財産管理をはじめ、本学図書館の管理運営に関する質問が多く出された。

そのほか、図書館庶務課では、図書委員会、収書委員会、特別資料選定委員会、新聞・雑誌委員会、学習用基礎資料選定委員会、中央図書館学習用図書選書委員会等の事務局業務を担っているが、いずれも図書館運営のために大切な会議体である。円滑な会議運営のために腐心している。

整理課

和書・書店連携システムは、開始後3年目を迎え、連携システム発注分のほか他社発注分も整理・装備業務のラインに取り入れたため、年間整理冊数は約2万冊に昇った。これは、2002年度和書整理冊数の60%を超える数字となっている。このため、専任職員が翌日行う書誌チェック業務が、大きな負担となっている。

中国書・ハングル図書も、NIIの多言語対応資料の目録入力作業が開始されたことにより、全ての中国書・ハングル図書をNII経由で登録するようになった。このため、一時停止状態としていたハングル図書の整理も進み、滞貨を徐々に減らしている段階である。

洋書については、4月以降担当スタッフが安定したこともあり、毎月コンスタントに整理することが出来るようになり、年間整理冊数は昨年立てた目標1万冊をクリアすることが出来た。これは、洋書の年間整理冊数の50%を超えている。

このように、和・洋とも業務委託が安定して処理することが出来るようになったため、その分の滞貨は殆ど見られず、昨年図書館庶務課で調査した、受入日から配架済日までの日数は、休日も含めて平均で2週間を切っている。

2002年度からは、和・洋とも受入業務を図書館庶務課から、また新規受入図書の装備業務を閲覧部署から移管され、一般職の人事異動が行われた後、実質5月から開始した。受入業務が移管されたことにより、一部の寄贈、簿外、逐次刊行物等は、発注データを作成する段階を省略し、受入・整理業務を同時に行うことが可能となり、省力化・迅速化を図ることが出来た。このことについては、和泉、生田両図書館でも出来ることなので、より一層の迅速化を図るため各館で行うことを今後の課題とする必要があると考えている。

また、新規受入図書の装備業務を一括して行ったことにより、各閲覧部署での業務が軽減され、その分サービスの充実に寄与したことが想像される。しかし、装備業務の中でブッカーの全面装備はその経費の70%にもなることから、装備仕様を見直す必要があると思われる。

未遡及・未整理図書のデータ化では、昨年度から続いていた旧分類（ABC分類）洋書の整理も終了し、渋沢先生寄贈図書の二期寄贈分、および西尾先生寄贈図書、東京裁判

関係資料の洋書部分の整理が終了した。また、永田先生寄贈トルコ語資料についてはレコード調整が必要なものおよび逐次刊行物を除いて、ほぼ整理が終了した。また、貴重書庫にある「別」マークの遡及も終了した。

分類コードについては、貴重書の分類コードに進展がなかったが、明大文庫については総合サービス課との協議を重ね、その利用の問題・保存の問題にまで検討を進めている。

データチェック業務については、図書館庶務課システム担当者と打合せを重ねるとともに、とりあえず整理課でできる範囲のデータ修正を開始したが、短期嘱託職員の離職が相次いだため一時休止とし、次年度業務委託で開始することにした。

総合サービス課

2002年に中央図書館が日本図書館協会建築賞を受賞したこともあり、内外から多数の見学者が来館した。見学者だけでなく、図書館の利用者もまた昨年より10.3%増加し、994,865名を数えた。試験期には1日の来館者が1万人を超える日があり、空席を探す学生のために席をカバンなどでふさぐことがないように職員が巡回し、注意を呼びかけた。

2002年に新たに実施した利用サービスは次のとおりである。

1. 学部及び短期大学学生の貸出冊数6冊から10冊に、大学院博士前期課程の学生の貸出冊数10冊から20冊に増やした。
2. インターネットなどを活用した情報検索ガイダンス（参加者106名）とLEX/DBインターネット、日経テレコン、FirstSearch、LexisNexis、SD21などの商用DBの利用ガイダンス（参加者84名）を実施した。
3. 自動貸出機を1台B2フロアに増設し、都合2台となったことで、利用者の貸出手続きの混雑が緩和された。
4. 休日開館時の貸出（自動貸出機対応）を開始した。
5. 和泉・生田図書館からの資料の取寄せや貸出延長の手続、貸出中の資料の予約が、館内のパソコンあるいは館外から、図書館HPにアクセスして利用できるようになった。
6. マルチメディアエリアの利用時間を8時45分まで延長した。

課業の大きな変化は嘱託職員の業務を業務委託に変更したことである。短期嘱託職員の榊明朋への移籍を中心に検討し、10月から一部貸出カウンター業務について実施した。引き続き2003年度から業務委託の範囲を拡大して行うための検討を関係部署と行い、貸出及び蔵書業務補助、マルチメディア業務補助、ILLなどの業務を行うことが確定した。

職場研修は、①業務委託と専任職員の業務、②災害時利用者避難誘導と消火設備の確認という課題のもとに行った。特に②は全職員を対象に神田消防署員による講演と防災センター担当者より避難経路の確認、避難誘導方法、消火設備の使い方などの具体的な説明があり、防災や避難誘導についての知識を共通化することができた。

資料保存の観点からは、和装本の貸出及び複写禁止などの利用を制限するための処置をとった。同じく 1900 年代後半の洋図書についても資料保護の観点から、和装本と同様に利用制限するための措置をとった。

資料の公開については、1 階ギャラリーで「図書の文化史」展（7 月 1 日～10 月 30 日）、「日本近代の詩人」展（11 月 12 日～2003 年 4 月 30 日）を開催し、写本やインクynaビラ（「Diuus Plato」プラトン全集）などの貴重書、和泉図書館のコレクションである「日本近代文学文庫」の初版本を多数展示した。前者は図書館学の授業と、後者は文庫の選定委員であった教員と連携した企画であり、ともに大変に好評であった。

施設面では、記念図書館書庫スペースがほぼ満杯となり、受入図書を配架するための書架移動がルーチンワーク化し、保存書庫への資料移転が課内での検討課題となった。

利用者からの要望としては、中央階段エリアが吹き抜け構造になっているために地下 1 階・3 階のラウンジからの話し声が閲覧席に響くという苦情が多数寄せられた。設計会社や関連部署と対応策を検討した結果、建物の構造上完全な遮音は困難であることから、テーブルを撤去するなどの措置を取り、巡回回数を増やすことで利用者への注意を喚起した。

和泉図書館

和泉図書館は、「利用しやすい図書館」を目指し、資料の充実、施設の改善、資料配架の工夫等を行っている。2002 年度は、現物選書の開始、OPAC 端末の各開架閲覧室への分散配置、床カーペットの改修等を行った。また、昨年設置したパソコンルームを効果的に活用する方策の一つとして、ラップトップ・パソコンの貸出を開始した。今年度も、図書をより身近に感じてもらうための講演会「著者と語る」を開催した。

1. 学習用図書の見計らい現物選書を開始した。現物選書によって、選書が適正・迅速に行われ、購入した新刊書が、より早く利用者の手元に届くことになった。
2. 貸出用パソコン（20 台）の館内貸出を開始した。昨年、談話室・教職員閲覧室・会議室を改修し、パソコンルームを設置し、そこに情報コンセント 78 口（78 机）を設けた。ラップトップ・パソコンの貸出により、利用サービスの向上、パソコンルームの活用化を図った。
3. 第 2、第 3 開架閲覧室にネットワーク工事を行い、参考室の OPAC 端末 9 台のうち 2 台を、第 2、第 3 開架閲覧室に各 1 台移設した。これにより、各開架閲覧室内、乃至、近接場所に OPAC 端末が設置され、利用上の便宜を図った。
4. ポータルシステム（OPAC 端末からの配送依頼、予約、貸出延長、書誌詳細・一括所蔵ダウンロード／メール送信）が稼動した。これまでの OPAC 端末は、図書館サイドからの情報提供であったが、このポータルシステムは、利用者から図書館への情報発信であり、図書館システムの一つの進化である。なお、ポータルシステムは中央・和泉・生田図書館共通のシステムである。
5. 館内整備として、エントランスホールのシラバス本コーナーの配置替え、第 3 開架閲覧室の床カーペットの張り替え、木製閲覧機の座面張替え、などを行った。

6. 和泉校舎研究棟の合同研究室及び資料室に配架されていた図書館所蔵資料のうち、利用の減少した資料について、教員との了解の下に、和泉図書館書庫への配置替えを行った。(約 500 冊)
7. 第 5 回図書館講演会「著者と語る」を 11 月 8 日(金)に開催した。今回は、本学短期大学教授黒川鍾信氏を講師にお迎えし、「ウルトラマンから寅さんまで、監督・脚本家・作家の執筆現場―神楽坂、ホン書き旅館『和可菜』の 50 年」の演題のもとに講演が行われた。
8. 和泉キャンパスで開催された「明治大学杉並区内大学講座『日本近代の絶唱』―大正編―」(10 月 11 日から 11 月 2 日の毎土曜日)に合わせて、和泉図書館所蔵の近代日本文学文庫のコレクションの中から、佐藤春夫、三好達治、室生犀星、萩原朔太郎の著作を館内に展示し、来館者に紹介した。また、2002 年 11 月 1 日から 2003 年 4 月まで中央図書館において、日本近代文庫の所蔵本を展示した「日本近代の詩人」が開催された。

生田図書館

昨年度に引き続いて、「利用し易い図書館」の構築を目標とする改善を行った。幸いにも、関係機関(各位)の理解・協力と課員一同の努力によって、永年の懸案事項であった書庫整備が完了するとともに、開館時間の延長も 2003 年度からスタートすることになった。以下が取り組みの主要項目である。

なお、日常業務の範疇と思われる事項については報告を割愛することにした。

1. 休日開館

足掛け 3 年にわたる準備を経て、4 月 14 日(日)からスタートした。2002 年度の休日開館日数と入館者数は、63 日、13,933 名で、1 日(1 回)平均としては 221 名の入館者であった。この休日開館実施に伴い、生田図書館の 2002 年度開館総日数は 327 日となり、私学の図書館としては屈指の開館日数を数えることとなった。

2. 書庫整備

2002 年度が仕上げの年となった。整備には約 20 万冊の図書・資料の移動が伴うため、外部業者による運搬を余儀なくされたが、8 月と 2 月の 2 段階に分けた作業の結果、生田図書館の長年の懸案事項であった「書庫整備」が完了した。この整備により、①製本雑誌を、若干の例外を除いて分類番号順に配列 ②「別置扱い」図書を正規の場所へ移動 ③開架図書全体の配置換え ④旧バックナンバー書庫の一部を開架スペースに変更 が行われ、利用者の B2 書庫への入庫が可能となると同時に、各種資料へのアクセスが格段に改善されることとなった。

3. マルチメディアコーナーの開設

僅か 8 台のパソコンではあるが、4 月の試験運用に続いて 5 月 7 日から本稼動に入った。この開設に伴い、利用者が独自に各種情報へアクセスすることが可能となり、中央図書館のマルチメディアエリア同様、コーナーの利用率は大変高い。

4. 開館時間の延長

生田校舎の施設利用は、原則として午後 10 時までとなっている。しかし、実験・実習が時には深夜に及ぶことから、生田図書館の開館時間延長を望む声が強かった。図書館ではこの要望に応えるべく、生田図書課の職場研修において実施方法の検討を行う一方、図書館スタッフ研修では理工学部図書委員から実施の要望が出され、生田図書館の開館時間延長は図書館全体の課題となった。その後、各機関での検討・承認を経て、2003 年度から、平日は午後 10 時まで開館時間を延長することが決定した。この延長時間帯は業者委託で行うため、休日開館同様、サービス内容に制限はあるものの、全国の自然科学系図書館の中でも、一級の開館時間を確保することとなった。多数の学生・教職員の利用を期待してやまない。

5. 第三開架閲覧室の拡張

旧ニューメディア室と第三開架閲覧室間の壁を撤去し、第三開架閲覧室を拡張した。この結果、旧ニューメディア室部分閲覧席の圧迫感が除去された。

